

---

# 爆音卅戦争

ねこたん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

爆音卍戦争

### 【Nコード】

N5350D

### 【作者名】

ねこたん

### 【あらすじ】

できたばかりの暴走族！爆鬼天は隣町の族との勢力争いに日々はげんでいた。しかし、あるひ総長の最愛の人がさらわれ、敵は最強の男、蛇と手を組んで爆鬼天をつぶそうとする。この、族の運命はいかに？若き男たちが自分の1番大切なもののために雨の夜を爆走する！（生徒会長が愛死天流の番外編！です）

**前編：真夏の夜の夢（前書き）**

生徒会長が愛死天流の番外編！です

## 前編：真夏の夜の夢

### ブーンブーン

けたたましいバイクの音がする。黒い特攻服に身をつつんだ若き少年たちが何人も鉄の馬にまたがり、暴走している。

ここ、青海町では、1ヶ月前に強力な暴走族、爆鬼天と呼ばれる集団ができた。これは、その族の物語である。

時期は現在8月である。太陽がサンサンと照りつける猛暑の季節。

このできてまもない暴走族にはとある問題があった。ちょうど同時期に隣町、宝美町にできた暴走族、白龍爆走連合、通称白龍と勢力争いをしていると言う事だ。できてすぐに勢力争いだなんて・・・。

そんな中、土曜日の爆鬼天の集会でのことである。

「みんな、あつまったか？」

総長、湯水がみんなに声をかける。

「あきらたちがまだきてやせん」

「そうか・・・」

いつものような会話をし集会をしていると突然1人の男が飛び込んできた。

「総長、大変です。あきらたちが、東のゲーセンで遊んでいたら、白龍のやつらが攻めてきてやられてしまいました！」

あきらとは？

爆鬼天の副リーダーダ格の男で、そのつれ3名とゲーセンに行っていたところ、白龍にボコされたのであった。

「あきらは、どうした？」

心配そうに総長が聞くと、

「つかまって、今頃ケジメかと・・・」

「よし！助けに行くぞコラア！」

掛け声とともにいつせいにバイクにまたがる爆鬼天の連中・・・。  
集会所からさほど遠くないゲーセンに向かった。

ゲーセンの駐車場には、白い特攻服を着て、バイクに龍の旗を掲げた連中がいた。白龍だ！

その中に黒い服をきた人間が4人ほど正座させられている。敵の数は約15人・・・かなりの数である。

しかし、湯水もその手下たちもビビルことなく近くまでバイクで接近し、

「かこめえ！！」

湯水の言葉にそれに続く暴走族たちが白い特攻服をきた男たちのまわりをグルグルまわりながら、たまにヤンキーホン（ラッパ）を鳴らしたり、木刀でつついたりして戦闘が開始された。

「ああ？なんだ？おめえーら！」

白龍のやつらの質問に総長は

「爆鬼天じゃ！ボケエ！」

そう、どなり声をだすとバイクを止め堂々と地面に降り立つ。

「俺の仲間を帰してもらおうか？さもねえーとおめーら！ぶっ殺すぞ！」

ニヤニヤと笑いながら白龍の1人が

「そりゃあおもしれえ！ やってみな！」

その言葉で完璧な戦闘が行われた。木刀、バッド、鉄パイプ、火炎瓶など様々な武器が使用された・・・駐車場は戦場と化した。

月が出る時間、爆鬼天はバイクにまたがり道路を走っていた。時折聞いたことのあるようなメロディーのラッパ音をヤンキーホーンで鳴らしながら。

パラリパラ、パラリパラ　パラリラ  
ツタラ

ヤンキー関係者は知っていた。この音楽が爆鬼天の勝利を告げる音楽だと。

ゲーセンの駐車場で行われた激しい戦闘は爆鬼天のみごとな勝利に終わった。総長の湯水の喧嘩の腕はたいしたもので、相手がいくら武器を持っていようとすべて素手で倒してきた……当然、族のみんなからも尊敬の眼差しでみられていた。しかし、

あの戦いから4日がすぎたあくる日に湯水は突如として病院に運ばれた。あきら等の複数のメンバーが病院に駆けつけた。

「総長、どうしたんすか？なにがあつたんすか？」  
心配そうに自分を眺めるメンバーたちに湯水は言った。

「すまない……麻里がつかまってしまって……俺だけで助けに行ったんだがかなわなかったよ。」  
麻里とは？

総長、湯水の愛しの人。つまり彼女である。性分はギャルだが優しくメンバーのみんなからも理想の女性と言われるほど美人だった。その麻里は2日ほど前に白龍につかまって宝美町につれていかれたというわけである。湯水は自分1人で助けに行っただが、しくじったのだった・・・

「そんな・・・じゃあ俺らが行きます。俺らが総長の仇とつてきます！」

そう言っただッシュで出て行くとするメンバーに湯水は

「だめだ！行くんじゃない！あいつが・・・あいつが白龍と手を組んでる。」

「だれです？」

すると、湯水は大きく深呼吸すると・・・

「蛇だ・・・」

そうゆっくり言うくとクタリと横になり寝てしまった。

蛇・・・聞いただけでぞっとする。この近辺最強の暴走族、”華亜悪”の総長で喧嘩で右にでるものはいないといわれている。彼に目をつけられたらおしまいとまで言われている。なかがわゆうや本名、中川裕也である。



その言葉を聞いて、他のヤンキーたち立ち尽くした。勝てるわけがねえ・・・そう思ったのだろう。

総長はくやしさのあまり涙もながせないでいた。愛するものと、愛するチームがもうすぐ消えてなくなるかもしれないのだ・・・

まった。

真夏の夜の夢はそうして始

前編：真夏の夜の夢（後書き）

本編もよろしくお願いします。

本編　く生徒会長が愛死天流く

<http://ncode.syosetu.com/n4235d/>

超優等生な女子、山内雛菊と超不良な赤城幾斗の爆走ラブコメです。  
ひまだったらみてください。さらに暇だったらコメントください。

中編：不幸中の幸い（前書き）

むふふ  
W  
W

## 中編：不幸中の幸い

爆鬼天の連中の中は乱れきっていた。蛇という名を聞いただけでメンバーのほとんどがビビリ、族を抜けようとするものが多発した。

「なあ、この族もそろそろおわりだぜ？」

「そうだな、シメられるまえに抜けようぜ？」

とあるメンバーの2人がそんな話をしているとあきらはその2人の胸倉をつかむと、

「おい！お前らいつからそんな腰抜けになった？」

「そ・んなこと言われても相手が相手でしょ？」

たしかに、現在の爆鬼天では勝ち目が無い。しかし、あきらは

「ふざけんな！爆鬼天が白龍なんかに負けるわけねえだろ？」

「そ・んな強気なこと言っても、あんたも負けた暁には命乞いするんでしょう？」

「…………あきらはだまった…………それは、確実に負ける戦争だし、しかし自分はこの爆鬼天が負けるなんて思いたくも無かった…………そう、思いたくなかったただけだった…………自分でもわかってる負けるって。」

人生には変えられない運命があるんじゃないだろうか？これが爆鬼天の運命か？

「お・・・おい。助けてくれえ・・・」

そう言って1人のメンバーが集会所にやってきた。

「どうした？」

あきらが問うと、

「白龍と蛇の単車がこの近辺に来て・・・東ゲーセンと南公園がのつとられた・・・」

「はあ？そこに味方が何人かいたろ？」

「全員やられました。」

ボー然と立ち尽くすほかのメンバー。きっとビビッて身動きもできないうだろう。

このまま奴らにのまれるのか？この族は・・・

悔しくて口も開けないあきら・・・そこに1人のメンバーの男が近寄った。

「なにしてるんですか？あきらさん。助けに行きましょう」

そうなんの変哲もなく言う男・・・武藤勇気であった・・・

「は・・・はあ？助けられるわけねえーだろ！逆にやられちまう」  
聞いてたメンバーのみんなが口を開く、すると武藤は

「いいじゃないですか負けても、まあ負けないでしょうけど」

「はあ？相手がだれかわかってんのか？」

「いいえ、誰です？蛇つて・・・」

「ったく・・・これだから・・・いいか蛇つてのは・・・」  
言おうとしたメンバーの男を手で制すると武藤はゆっくり

「私があきらさんと一緒に白龍につかまったとき、湯水さんは助けにきてくれました、私はそれだけで嬉しかった・・・ああ・・・見捨てずにいてくれたんだなあーと。」

メンバーのみんなはただひたすら武藤の話を聞いていた

「だから、勝ちとか負けとかそんなじゃなくて、困ってる、助けをもとめてる仲間がいるならば、それは助けに行くべきなんじゃないですか？それが仲間でしょ？ね？あきらさん」

そう言つてニコニコほえみながらあきらに問う武藤・・・それに対してあきは

「お・・・おう」

その一言が終わつた瞬間「おお！！」とか「行くぞオラア！」とか各地で雄たけびの声を叫び、皆いつせいにバイクにまたがる。

夏の夜の月が出ている、時刻は8時・・・そんな時間に南の公園では激しい戦闘音とラッパ音が鳴り響いていた・・・

「どりゃあ！」

ごっふ・・・

「うりゃ！」

掛け声、雄たけび、叫び、鈍い音などいろいろな音が聞こえてくるがそれも9時には終了した。

予想していた結果とはいえ、爆鬼天は惨敗・・・しかし、仲間を助けることはできた・・・不幸中の幸いと言うやつである・・・

次に日の集会で昨日つかまっていたメンバーの男からあきはこんなことを聞いた

「あきらさん、やつら明日攻めてきますぜ！」

「ええ？マジ？」

「はい、やつら言っていました。」

「・・・・・・・・」

もう、終わりだ！次こそつぶされる・・・

「あきらさん、」

武藤があきらにニコニコしながら近づくと、

「行きましようか、宝美に」

「はあ？」

武藤の言葉にみんながいつせいに笑い出す。

「なにバカなこと言ってるんだよ！ボコられるのがオチだぜ！」

「そうだそうだ！」

メンバーのみんなは口々に言った、しかし武藤はただ平然と言ったのであった。

「だって攻撃してくるんでしょう？じゃあ逆に攻撃してやりましょうよ」

しかし、みんななかなか賛同しなかった。たとえ相手が白龍でも、バックには蛇がいる・・・それが何よりも恐怖をあおっていた。

「みなさん行かないんですか？じゃあ僕だけでも行かしてもらいますよ？」

そう言つて武藤はバイクにまたがりただ1人ラッパ音を響かせながら走つた……

あきらをふくめたメンバーは、その背中をいつまでも眺めていた……。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5350d/>

---

爆音記戦争

2010年10月11日15時10分発行